

祖父の笑顔



幼い頃の私は、裏山へ行って自然の中で遊ぶのが大好きな子どもでした。両親が共働きだったこともあり、そばにはいつも祖父がいて、私のことを笑顔で見守ってくれていました。祖父は、車の運転が好きで、幼い私を乗せていろんな所へ連れて行ってくれました。ただ、頑固なところもあって、自分の考えを簡単には曲げず、祖母や母が意見をしても素直に聞くことは、まずなかったそうです。しかし、孫の私の言うことだけは、「そうやなあ。」と聞き入れてくれるのでした。

二十年あまりの月日が経過し、私は社会人として実家を離れて生活するようになりました。結婚し、家庭を持つてからは、祖父に会う機会がずいぶん減りました。

八十歳のお祝いを終えた翌年、祖父が脳梗塞のうこうそくで倒れ入院したことを母からの電話で知りました。突然の連絡にどうしてよいのかわからないまま病院に駆けつけました。初期対応が早かったこともあり、一か月ほどで退院できるだろうと母から聞いた時には、ほっとしました。

数日後、見舞い中に廊下に呼ばれ、母からこんなことを伝えられました。

「今回の事で、退院しても、今までと同じような生活は難しいやろな。もう車の運転は無理やと思う。」

母は、この機会に祖父に運転免許証の返納を勧めようと思っっているが自分が言っても聞き入れてくれないかもしれない。そこで、私から話をしてほしいと言うのです。病室に戻った私は祖父としばらく談笑する中で、思い切って運転免許証返納の話を持ち出しました。それまで笑っていた祖父は、今まで見たこともない切ない表情になりましたが、しばらく考えた後、小さくうなずいてくれました。

退院して、しばらくしたころ、祖父が心配で様子を見に行きました。家の前の畑にいた祖父に私は「行きたいところに簡単に行けなくなって不便やろ。いつでも運転するで。」と、声をかけました。すると、祖父はじつと私の顔を見て、こう言いました。「ゆっくり歩くのもええぞ。いろんな幸せが見えてくるから。」

その時は、祖父の返答の意味がよく分かりませんでした。母の一言で理解できました。

「じいちゃん、私が植えた花を見て、とても良い笑顔してたんだよ。今まで花なんて見向きもしなかったのに……歳を取るのもいいことかもね。」

私の心の中に、「老化」は辛いこと・車を運転できなくなった祖父は「可哀そう」という決めつけがあったこととに、その時初めて気づきました。そして、人生の大先輩に「幸せの感じ方は人それぞれで、年齢とは関係ない。」そんなことを教えてもらった気がしています。

もうすぐ桜の季節です。私が幼い頃に祖父と一緒に過ごした思い出の裏山まで、祖父とゆっくり散歩して、一緒に桜を楽しみたいと思っています。当時の私と同じくらしいの年齢になった我が子たちを連れて。